
彼女の涙と勇気

はらっぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の涙と勇気

【Nコード】

N0948L

【作者名】

はらっぴー

【あらすじ】

あなたは全力で生きていますか？

これはこれは、全力で生きようとした少女たちの物語です。

鈴村 加奈子はある男子生徒に振られてしまったことでとてもへこんでいた。

「私、ダメダメだ」

空はとてもすっきりと晴れていた。この場所という季節は秋。爽やかな秋晴れと言うところだ。

私は陸上部に入っていた。長距離の選手…

出はなく補欠だった。

親友の長谷 美弥は長距離の選手だった。しかし私は自分よりも良い成績を残す親友を誇りに思っていたし、なんせ美弥の人柄が好きだった。

「そんなことないよ、長距離だって私抜かれそうだし」と美弥

「そんなことない、だって山辺君に即答されたし」

「きつと緊張してたんだよ気にしない気にしない」

「ゴメン、そんな気になれない。今日は帰るよ」

私は親友の励ましを流すように聞いていた。

最近、何もかもがつまらない。生きてる実感がわかないと言うか何をしてもおもしろさを感じない。

「あーあ、つままない」と私

「そんなこと言わないで」と美弥

「もう部活なんてつままないよ」

「もうちょっとだけ頑張ってみよ」

いつも通り、親友の励ましを軽く流していた。

私は部活にいかなくなった。

私はつるむ相手を変えた。世間では不良といわれる奴らとつるんだ。

世界を嫌う彼女らとの生活は違う世界にいるようで楽しかった。
私は煙草を始めた。
みるみるうちに運動ができなくなった。

ある日美弥が

「加奈子、部活に帰って来てよ」

「うっせーな、てめえはうちの親か」

「違うけど、親友だよ」

「はあ、てめえを親友だと思ったことなんて地球が滅びようがねーよ、いくぜ、花連、さな」

「…なにあいつ、うっせー」

美弥は酷い顔で泣いていた。

私は酷い顔で笑った。

帰り道、みんなと別れたあと、私は今までにないぐらい泣いた。

今のままで良いのか？

親友を誇りに思うと共に、どこか嫉妬する部分も無かったとは言えない。

だけど、言い過ぎたかな？

私は謝りたかった。だけどあのメンツと一緒にいると謝りにくかった。それどころか何故か強く言ってしまうところがあった。しかしそれにちゃんと罪悪感を感じていた。

ある日、屋上にタバコを吸いに言ったら。山辺君と美弥があっっていた。

「…美弥さん…付き…てください」

……そういうことだったのか。

私は泣いた。美弥には酷いことをした。

でもこんなこと…

「おい、美弥！…どういう事だ」

「あつ、加奈子…ちよつとね。あ、でも断ったよ。ちゃんと加奈子のことアピールしたよ」

「…あんさ」

「なに？」

「あんたいつももうぜーんだよ、そういう気遣い、なに私に恩売りたいの？そういうこといって山辺君と付き合ってたでしょ。私のことバカにしてんの？殺すよ？」

「違うよ、本当に「うるせーお前キメーよ死ねば」

季節が冬に変わる頃、私の罪悪感は無くなった、美弥に対する本格的なイジメだ。

上履きを隠す程度ではない。机を窓から捨てたり着替えを排出物でぐちゃぐちゃにしたり。

いつからか美弥は来なくなった。

それは寒い冬が終わり、暖かい春を迎える頃だった。

ある日私は喧嘩で怪我をし、病院に行った。

そこにいたのは、ガリガリに痩せ細った美弥の姿だった。美弥は私と目があつた瞬間か細い足を必死に動かし、逃げた。

私は周りも見ずに、病院を走った。

「なんで、言わなかつたんだよ！！」

「だって迷惑かけたくなかつたもん」

「なんでだよ！！あんな酷いことして、なのにあんなに私を気遣ってくれて…」

「だって、私たち親友でしょ」

私は泣いた。暖かく、冷たい涙だった。

「私ね、筋肉がどんどん衰えていく病気なんだ。原因は分からないけど…夏の大会は頑張つて出たかった。だけど出られそうにないん

だよ。ゴメンね。ありがとう私と喋ってくれて、ありがとう、私のことちょっと気遣ってくれてたんだよね。ありが「うるせー!!!」！私が何したんだよ、私が美弥にしてあげたことなんてなにもない……」

「あるよ」

「なにさ」

「私を側から応援してくれた。自分も選手になりたいのに、私のこと支えてくれた。ありがとう私が一番大事に思ってたのは加奈子だけだよ、だから私の変わりに大会に出「そんなこと言うな！美弥じやなきやダメなんだ。私なんか、私なんかじゃ……」

「そんなことない、そんなことないよ。私は私のために加奈子に走って欲しいんだ。」

「美弥はいつもそういつて私なんかのことを励ましてくれたのに、いつもおちやんと聞いてなくて……」

「もういいんだよ終わったことなんだ、人生つてね昔は長生きしたいなんて思ってた。だけど今はこんな状態だからかな、中身の濃さだと思っただよ。正直言って加奈子にあんな事されてとっても悲しかった。いっぱい泣いた。でも加奈子はわかってくれた。それでいいの」

「美弥…… ゴメン、本当にゴメン謝りきれない。私どうすれば？」

「走って。私のために」

「……わかった。」

「ありがとう」

「だけど私やるからには優勝するから、美弥も病気を治してよ」

「うん、ありがとう」

私は泣いた。凄く酷い顔で、しかし酷く、綺麗な顔だった。

私は変わった花蓮たちとつるむのをやめた。タバコもやめた。私は無くした信頼と時間を取り戻すために必死だった。みんなからはバカにされた。大事なものを取り戻しかけていた。季節は移った。

春夏秋冬、私は死に物狂いだった。すべては美弥のために。雨の日も風の日も、嵐の日だって雪の日だって走り続けた。

無くすのは簡単だけど取り戻すのは難しかった。昔の仲間にいじめられた。でも自分がしたことだから逃げなかった。やっと信頼を取り戻しかけていた。

美弥の容態が急変したと同時期、大会が迫っていた。

「美弥、大丈夫!？」

「うん、なんとか」

「明日、大会だね。」

「うん、とつても緊張してる。けど」

「けど?」

「頑張れる。美弥のために。」

「明日、加奈子の走る姿、見に行く。」

「大丈夫なの?」

「うん」

それは美弥のついた優しい嘘だった。

とても、晴れた日だった。私は嬉しかった。美弥が見に来てくれるなんて。

「大会出場者は中央に集まってください。」

予想以上の人数だった。しかし今までしてきた努力が自信となっていた。

次は長距離だ

「…加奈子」

優しい声がした。

「美弥！！！よく来たね。1位とるからね。」

私は一言言いスタートラインにたった。

「位置について、よーい」

みんなが一斉に構えた

よーいドン。私は走り出した。一步一步確実に地面を蹴った。走ってる途中はなにも考えなくて済んだ。

私は先頭グループに入る事ができた。美弥には敵わないけど。走って走って走りまくった。身体中の力を振り絞った。

だけどラストスパート、力が出なかった。私は後悔した。ちゃんと練習してなかったから最後の力が出ないんだ。

「あと少し、ファイター」

優しい声がした。美弥だった。私はうなずいた。ありがとう、また励ましされちゃった。

私は凄く力が出た気がした。美弥のために私のために。走って走って走って走って走った。

ラストの坂、2位までいったんだけど最後の一人が抜けない。私は声を出した。早く走れる気がして。

「美弥ああああああ」

最後のゴールテープ、

倒れかかるようにして切った。

「やったー加奈子！！優勝だよ」美弥ああ、

美弥は倒れた、

私は泣いた。嬉しくて、悲しくて、けどもうなかない、それは美弥がくれた優しさがあるから、それは美弥がくれた自信があるからそれは美弥がくれた……

ありがとう美弥、ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0948/>

彼女の涙と勇気

2011年1月26日04時18分発行